

大阪から、高松から

緑が丘、松分会で旧友が集う



せつかくの記念写真だったが、うれしさにどうも手元がくるったようです。

淡い秋の色合いのコスモスが咲いて、雑草の中にもれる杜宅の露路に、加倉さんはカメラを手にしてしばらく佇んでいました。

佐賀から十四年ぶりに訪れて、昨夜はなかなか眠つたけれど、今朝は五時に起きて九時前には緑が丘に着かれたという事です。

十月十六日、日曜日の昼ときに元の検町地域分会の組合員、主婦会員の仲間たち三十八人が地元をはじめ大阪の松枝さん、四国・高松の松下さんご夫妻、それに九州の各地からそれぞれの思いを胸にぞくぞくと集まってきました。

三池闘争時に地域分会会長をつとめられた宮本さん先頭に、井上さん、柴原さん、恒石さんにお世話をいただき、はじめ会場を集会所に予定していましたが急遽新生区料理店に変更しての親睦会でした。

会場では、あこからくる仲間たちと懐かしさに手を取り合い、肩を寄せ合って久々の再会を喜び合いました。歳のせいかな、なかなかシャッターを押すまで手間のかかる記念撮影の風景も、和やかなもので、みんな根気よく待ったものでした。

坂本さんから写真代の香煙があったこと、参加できなかった仲間たちの伝言の披露があり、松枝さん、仲間の長生きと健康を祝して乾杯の音頭をとられました。簡単な三池の現状説明のあとは酒宴となり、酒を飲み交わし、語り合い、藤丸さんの七面相に笑いこけたり、時の経つのも忘れていたものでした。

「奥さんたちや、みな若々しくて、美しくなられたなあ、この次はうちのやつも若くさせて連れて来いよ……」

「今日はたのしく、うれしく、ことばなし、禁酒も今日はかりは破りますよ」

カラオケの合い間に、ガンバロウ、三池の主婦の子守歌、流石と懐かしさで口ずさんだり手拍子をつらつらで、合唱にはならなかったものの、感慨もひとしおで、しみじみと味わっているようでした。

「苦しい、長いたたかいの中で、隣同志、分會みんなが励まし、助け合って生きてきたからこそ、二十数年の隔たりを少しも感じないで、こうしてみんなが集まられるとよ」と、老いた元主婦会員の感想もありました。

すきを通るような秋空の下に「今年度会う日まで元気な」と再会を約し、名残りを惜しみながらそれぞれ帰途につかれたのですが、短い一日だったように思えました。

今年一月に活動家のご主人に先だれた北九州の水町さんは、「二十数年ぶりです」と、わざわざ通勤電車に乗って帰られました。きつと懐かしい昔を思いを馳せられたことでしょう。

(松分會、松田忠博・記)

俳句

退職者

開田晃臣

山の鴨里へ下りきて秋深む
露草の昼も花咲きいる処
木洩日に咲きひろがりし赤のまま
溝そばの花めぐりとぶ蜂の居り
水に浮く藻叢の低くなりけり
秋水に映り黄蝶の沼わたる

肥後狂心

退職者

佐藤勉

ええ味方熊本弁で加勢する
控えて語れば愚痴になる昔
すきま風今日もわびしく独り酒
むつかしか知らずるとは知らせとけ
冥途も馴れて三途の川も平泳び
ひっかかり崖でミイラになつた

強制連行朝鮮人の記録から

②

宮浦第一協和寮

十六分會 武松輝男

大牟田郵便局の仮庁舎の前を、なっている。そのまま通りすぎると、やがて、五十七センチほどの二本のコンクリート門柱を見ることが出来る。

門柱には、自動車などの出入を防ぐ、太めの鎖が張り渡してある。その門柱から左右に延びた柵は、雑草がからみついていて、柵による土地の区画も判別しにくいものになっている。

柵の内側は、雑草も生えていない踏み固められた赤土と、丈の短い草が生えた緑との、まだら模様をみせながら、広々とした空地に仲間を担架で運んだ。

「収容所は、第一協和寮といっ

強制連行朝鮮人が、この宮浦坑の、炭坑の激しい生活を無理強いさせられたのは、昭和十八年であった。

強制連行された朝鮮人の収容所は、コンクリートの門柱が建つ正門の外側であった。

「確かにはわかりませんが、多分、技能訓練所を収容所に兼ねたものだと思います」

宮浦坑に働いたことのある労働者が指摘する建物は、正門に通じ

た、というところでした。食糧物は、藪のに入ったパン、それにだんご汁とか、そういうものだったというりましました。米の飯もあつたそうですが、大豆かすなどを混ぜたものじゃったそうです。

とつたです。真中の棟に玄関があつて、事務所もあつたです。二階建てでした。その真中の棟の左側にも天井のない渡り廊下をへだてて、二階建ての収容棟があつたです。

朝鮮人を収容した部屋は六帖七帖七十五とかあつたと聞いています。収容した朝鮮人は三百人くらいというところでした。

真中の棟の右側に、これも天井のない渡り廊下をへだてて、食堂と浴場があつたです。

「今日ばたのじく、うれしく、ことばなし、禁酒も今日はかりは破りますよ」

「ボツを炊くのが、一番嫌いよ」といってですね。防空壕が、棟と棟の間にあつた

です。朝鮮人はおよそ半分がいつも坑内に下がつたりしましたので、朝鮮人の半分と、日本人の管理、師者の入るくらいに広さじゃったです」

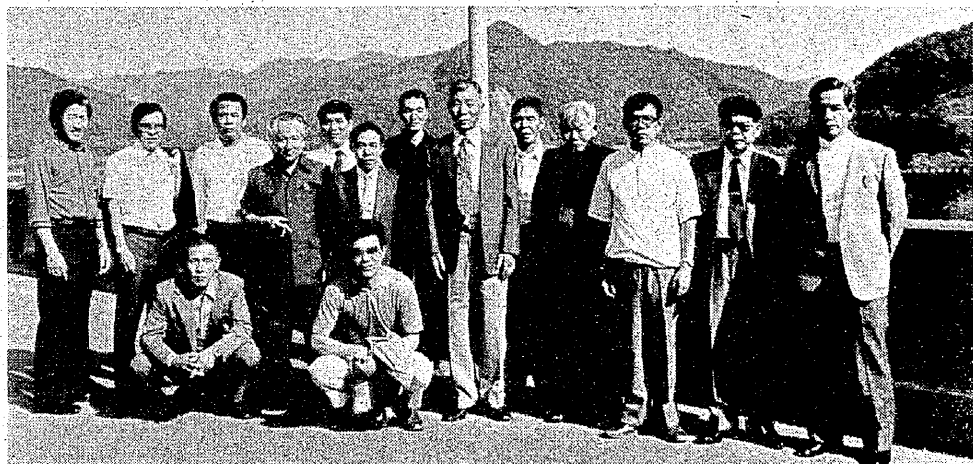
収容所は、いつも、泣き声と怒り声と涙声に満たされていた、という。それらの声は、収容所が終戦によって閉鎖されるまで、絶えることはなかった、ともいふ。

この異郷の収容所で、家族が住む国をしいながら、どれだけの朝鮮人が血を流したかは、いかにも見当もつかない。ただ、この宮浦坑を見下す佐古町の田福寺に、五十数体の遺骨と位牌が安置されていたことが、大牟田に強制連行されてきた朝鮮人たちの苦渋をいあらわしているように、哀れであつた。



(カットも筆者)

盛り上った職場旅行



三月に予定されていた職場旅行が諸般の事情で十月に延期され、約七カ月間待った旅行だった。

九、十日の連休を利用して、九日、一時七分大牟田を出発。玉名駅で乗車する中、松永阿氏を除き参加者全員十二時四十五分の集合にもかかわらず、十二時三十分には早々と集合、やがて車中の人指定席なので座席を回転させ、やがて酒盛りがはじまる。川内駅着三十分。その間、ボトルが四・五本空になったようだ。

この旅行は定年退職者の送別会も兼ねているので、退職された西田、山本阿氏と、開発第一番OBの吉行氏も元気に参加された。

川内駅からホテル差しまわりのマイクロボスで一路宮之城温泉へ向う。重たそうに頭をたれた稲穂や川内川の清流をながめながらの四十五分間だった。ホテルに到着

すると、新婚さんのお見送りホテルの前はごった返している。部屋の割りぶりもおわり、風呂に入る人、落ち着いて飲み直す人など、七時からはじまる宴会前のひとときをおもいおもいに過ごす。

さあ宴会のはじまりだ。カラオケあり、仲居さんたちの芸あり、ショーありで盛り上がる。十二時前まで五時間近く、大いに楽しんだ。

翌日は八時に朝食。九時ホテルを出発。全員疲労の色はない。

紅葉には少し早い季節であつたが鶴田ダム、曾木の滝などを見物しながら、一路水俣へと向う。水俣で昼食。一時五十分発の列車に乗る。まだ飲み足りない様子で酒豪連は、大牟田駅に着きまでワイスキーのトップを口に運んでいった。楽しみな旅。

来年の旅行が楽しみである。

(一分會、田中国広・記)